
我が道を行く者.....行くのはいいが行きすぎに注意しろ！！

とある世界の思春期男子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が道を行く者……行くのはいいが行きすぎに注意しろ！！

【Nコード】

N9228Z

【作者名】

とある世界の思春期男子

【あらすじ】

何か思い突きで書いてしまった作品。

息抜きの合間にも見てくれれば光栄です。

基本的に不定期更新、大体2週間から1カ月に一回の更新だと思っ
てくれれば幸いです。

第1話 「プロローグ」(前書き)

ついつい書いてしまった駄作です
つまらないと思いますが大目に見てください

第1話 「プロローグ」

季節はもう3月の後半を迎え、徐々に気温も高くなっている今日。時期的に少年や青年などは学校に通っている

表の世界では楽しそうな表情で楽しそうな会話が繰り広げられている事であろう

しかし、それはあくまで表の世界での話でありすべてが当てはまる訳ではない。

裏の世界ではそんな悠長な事を言っていられないのが悲しいながらも事実。

無論そのような事実を知るものもごく少数だけなのだが……。

裏の世界では大抵の人間が闇に染まった大人、その割合はほぼ九割九割と言う事は100%ではない

つまり、完全に大人が闇の中で生きている訳ではない事を表している生まれたばかりの子供や少年から大人まで実に様々な人間がこの世にはいるものだ。

心優しい者が闇の中で生活しているというケースも案外少なくは無い何らかの事情を抱え闇に行きながらも光にあたりたいと考える者もいる

だがそれは裏を返せば闇に染まりたくて染まっている者もいると言う事。

人を殺したくて闇に浸り者、苦しむ様見たさに闇の中で生きる者実に様々な人間で合成されている世界と言える事だろう。

唯、それが悪い事なのかどうかは誰にも判断出来はしない
その事実を知った物がどのような反応をするかは誰にも予測できる
ものではない
それだけは確かなる事実だ

光の中で生きるものなら闇の中で生きる者の考え方は理解できない
人を容赦なく斬り殺す、撃ち殺す、とにかく殺して殺して殺す
このような非人道的な行いは誠に理解しがたいものだろう
しかし、闇に染まって生きるものなら光の意見を真つ向から否定で
きる。

常に殺される危険を顧みず生活する身に置いて悠長な事は言ってい
られない
時には情を捨て非情になり引き金を引かなければならない瞬間が訪
れる

それは同時に裏の世界の過酷さ、表の世界の温さを表す
だから闇に生きるものは口を揃えてこう反論する事だろう。

光と闇は、交える事はあれど決して混ざりあわない
と。

闇の事を全く知らぬ者が飄々と大口なんぞ叩くな
と。

だがどのような世界でも必ず一人や二人はあるものだ

【常識の範囲外^{イレギュラー}】と呼ばれる人物の存在

常識を覆すような、禍々しく輝く物を持っている人物が。
しかし、大抵そのような人物は世間一体からは嫌われる

もつとひどい場合は肉親さえもその人物の敵となるのだ

それは『彼』のような人間でも対象外では無い

どれだけ優しい心を持っていたとしても、どれだけ平和な世の中を
どれだけ臨もうとも

結局は混ざり合う事は叶わないのだ。 水と油、光と闇のように……

「…………ガハッ…………！」

男が発したものだと思える苦痛の呻き

明らかに日常的とは思えない、異常ともとれる苦痛に満ちた声

その音が辺り一帯に反射するがそれに対する返事らしい返事は返っ
てこない

「（あ、あり得ない……何なんだあの男は？）」

今日の前で現実のものとなっている光景

そのあまりにも非現実的で信じたくない光景が故、男は信じられない
自分たちのような優秀な殺し屋が、たった一人の男

それもまだ歳も若い青年に完膚なきまでに叩きつぶされた事が

全身に痛みが走りもはや体を動かす事も出来ない男

それは男の身体を見ても一目瞭然だった。

体にまといっている衣服は汚れに汚れ、引き裂かれたような跡もある
その体には致命傷とはいかないまでも夥しい数の傷跡
その男の左腕は何らかの力によって切断されており血が溢れに溢れる
手に握っていた凶器さえもバラバラになっている

そして何より信じたくなかったのはそうになっているのは男だけではない事だ

自分と同じ事になりながら少し横に転がっている男達

そんな目にしたくない物が自分が数えただけでも6はあった。

誰の目から見てもそこ結論は一つ

完全なる敗北、唯それだけである。

その光景はある意味異常で無いといえは異常では無い

殺し屋が殺し屋に狩られる。そのような事態も決して珍しくは無いからだ

しかし問題はその状況ではない、その状況を作った人物だ。

「……………運が悪かったな、殺し屋一同」

男達を見下ろすような格好で立っている一人の青年

まだ高校生ぐらいだと思える青年が殺し屋である自分達を返り討ちにした

男は青年を真っ直ぐ見ているにもかかわらずそれだけしか分からな
いでいた

それは決して男の目が悪いのではない、目の前の青年が異常過ぎる
のだ。

顔はまるで表に出したくないのかおかしな面を付け、出る声も機械音そのもの

衣服は上下共漆黒に染まっており左手だけ漆黒の手袋がしてある
そして青年の首には異常に長い、季節外れのマフラーが巻かれている
まさしく異常で異端で奇怪で理解不能な人物
しかし男はその驚愕とは別にもう一つの事にも驚愕していた。

不思議と、この青年に殺されるとは思わないからだ

今の状況は相手が殺し屋が相手ならば確実に摘んでいる最悪なもの
そもそもすでに男はこの世にはいないだろう

7

だが目の前の青年からは殺気などが一切感じられない
唯男たちを行動不能にさせるために仕方なく攻撃を行った
そんな感情さえ抱かせる青年
これを異端と言わずして何を異端と言うのだろうか、男は吞気にそう思った。

「お前等の狙った相手が悪かったんだ。普通の人間なら死んでいる」
それだけ呟くと奇怪な青年は踵を返し歩み始める。
まだ自分という存在が残っているにも関わらずだ
男は残った力で声を絞り出した

「…………どこへ、行く…………つもりだ…………？」

「帰るのさ。生憎ある人物と会う約束をしているからな」

「殺さないのか……俺達を……」

「お前達の命は取らない。俺が殺す相手は……ある特定の人物達だけだ」

そのまま青年は風のように悠然と去って行った

初めから自分達はあの男の敵ではなかった訳だな
男もまたそれだけ考えると仲間たちと同じように気絶した
辺りの壁には壮絶な傷が付いているにも関わらず

『奇跡的』に死者の数はゼロだったという

「で、また随分と派手にやらかしたみてえじゃねえか」

「あれでもまだ抑えた方だ。本気ならあの辺一帯は吹っ飛んでいたさ」

とある建物の中でその会話は行われていた

一人は先ほど殺し屋たちを一方的に叩きのめした奇怪な青年
そしてもう一人はかなり歳がいった中年のおっさん
かなり失礼な表現ではあるがもはやおっさんはおっさんでしかない
世の中の法則で恐らく決まっている事の一つなのだろう

「というか仕事をほつといていいのか『総理』？」

「なぐに、お前さんほど忙しくねえから全然大丈夫さ『龍王』」

「……………その異名で俺を呼ばないでくれ。好きじゃないんだよ」

やや溜めてから再び機械音が建物の内部に響いた
どうやら青年の方はあまり異名が好きではないらしい
しかし総理と呼ばれた男は止める気は端からないように感じられる
もつとも口元が笑っていれば簡単に察することもできそうなもの
だ。

「本名の方がお前さんはもつと嫌いなんだろう？」

「……………分かったよ、今回は疲れてるから龍王でいいよ龍王で」

「ホントにお前さん苦勞人だな。肩とかこってそうだな」

「主に俺を狙った殺し屋の対処で肩は凝るし異常に疲れるし」

首を横に2回振って答える龍王

普段の彼ならばこんな気の抜け過ぎている行為は人前でしないのだ
がそこは親しい関係しかいないからこそやっているのだと総理自身
も理解しているため何も言わない

これだけ見ても彼らにはかなり強い絆のようなものがあると見受け

られるだろう

しかしその出会いはあまりにも複雑で微妙なものなのだが

「で、だ。こっからはちくとマジな話になるぜ」

「何故初めからマジな話をしない……いいよ、続けてくれ」

「近い内に『ヤツら』が何かをおっぱじめそうな感じがしい」

『ヤツら』という単語を龍王が聞いた瞬間だった

辺り一帯に濃密な殺気、敵意、憎悪とブレンドされた負の感情がまき散らされる

面を付けているので分かりはしないがその表情は穏やかなものでない事は確かだ

このように取り乱すことが分かっているながらも総理は話を切り出した、とはいえさすがの総理でもこのあまりにも常識から外れている濃密過ぎる負の感情は抑えてほしい所なのだが今の龍王に下手な事を言えば絶対にこの建物が吹き飛ぶ事が分かっているため口出ししない

また1段階苦勞が溜まって老けるな、と意識を逸らすのが精一杯である

「そこまで………そこまであいつ等は俺を怒らせ殺されたいのか…

……」

「（感情を表に出すのは別に構わねえけどよ……これはさすがに例外つてもんだぜ。よくもまあ敵さんもこんなヤツを好き好んで怒らせたりするもんだな。……今思ったんだがコイツが普段あんなに優しいのがまるで演技だと思っちまう）」

龍王がここまでキレているのは半分はこうなる事を分かっていながらも話を切り出した総理なのだが、本人はまさしくどこ吹く風のよう
うに考え事

尚その間も負の感情がまき散らされているため一切落ち着けない

「……まあいい。どうせあいつ等は俺の手で引き裂くんだ」

「（な）に堂々と日本の総理の前で殺人宣言してるんだこいつは……
……まあ止める気は毛頭ねえ。大体止めようとしたら周りが全滅しかねえ）そろそろ落ち着いたか？」

そろそろ頃合いだとみた総理が間髪いれずに言葉を割り込ませる
さすがに付き合いが長いだけあってタイミングは抜群だったようで
総理が声を掛けた時には先ほどのすさまじい負の感情は一切消えていた

「ああ、すまない。どうも感情があらぶってしまつて」

「そいつはまた穏便じゃねえ……分かったから殺気放つなよ。いくら殺されねえって分かつてても殺されると思うだろ？」

「了解。で、俺を呼んだ理由は？」

「な）に。これからお前さんには九鬼財閥の所でしばらくは生活してもらつ」

「死にたいようだな、龍の連鎖」
トラ・リン・バイト

龍王がたった一言呟いただけ
唯それだけのことなのに総理の身体は動かなくなる

理由は単純にして明確、地面から出てきた鎖のようなもので体を拘束されたからだ

ただその『鎖』だと思われる物もまた彼のように異常だった鎖なのに禍々しいオーラを纏い、鎖本体はかなり小型化された細長い龍のように（実際の見た目は龍そのものののだが）なっているおまけに自我もあるらしく舌を出しながら総理の方をじっと見ているこれもまた彼が裏の世界で生きている理由の一部でもある。

「おいおい、とつくの昔に武道の道を引退した俺に龍の連鎖とか舐めてんだろ。お前さん何が気に食わなかったんだ？」

「あんな魔窟に俺を放りこもつとしているバカが目の前にいたのでな。軽く耳でも落とそうかと思うんだが落とされる側としてはどう思う？」

「意見聞いてるくせに決定事項とかお前さんもかなり鬼畜だな」

「……お前が知らないはずがないだろ。俺が揚羽さんに気に入られてるのを。そしてさりげなくだが結婚を申し込まれている事を」

「（あゝ……あくまでそっちの方かよ）すまんすまん、すっかり忘れちゃってたい」

まだ言いたい事もあるようだったがさすがに自重する事にしたらしい確かに賢明と言えば賢明な判断だった、主に2重の意味で

「それでいい加減理由が聞きたい。俺が日本に帰国しなければならぬ理由を」

それを聞いて総理が再びきりつと顔を真面目なものにする

さすがにここからはマジだと悟ったのか龍王も鎖をはずす
それぐらい判断できる冷静さは残っていたようだ

「さつきも言った『ヤツら』がどうやら日本にいるらしい。おまけ
に日本政府の内部と繋がってるらしいんだ」

「誰と繋がっているかなどは分かっているのか？」

「残念ながらそこまでは分からねえよ。ただ一つ言えるのはヤツら
を探し出すには実力的にも頭腦的にも直感的にもお前さんが逸材な
んだ。そこでお前さんに依頼したいんだが……お前さん友達とか
全くいないから下宿先とかも全く当てが無いだろ？」

「野宿すればいいだけの話じゃないか。それかどつかのホテルを完
全に乗っ取る」

「いやいやいやいや、野宿とかお前さん何時代の人間だよ。おまけ
に後半のホテルを乗っ取るとか完全に犯罪行為だ」

龍王のような人間でもやはりいくつか欠点はある

その一つが今の発言に現れていた事、つまり他人が予想もしない発
言や行動をすることだ

前に総理が『もし両想いの女が3人いたらお前さんならどうするよ
？』と聞いた時の答えなんぞすさまじかったと未だに総理は覚えて
いる

何せ帰ってきた返答が『そんなの、3人とも抱けばいいじゃないか』
ときた

そんな質問をした総理も総理だが答えた龍王も龍王である

本気でこの人間の脳内が知りたいと総理が初めて思った瞬間だった。

しかしそれが仕方のない事だと総理自身が理解している
龍王は他人では想像もできないような壮絶な過去を聞きてきた猛者の一人でもある

多少はおかしくても目を瞑ろう、と決めている総理は良い大人なのか悪い大人なのか、いまいち判断しがたいのが難点であった。

「…………結局俺に選択肢は無いという訳か」

「そう落ち込むなよ。襲われれば襲い返せばいいだろうが」

「どうやら今度はマジで死にたいらしいな」

「おいおいおい！左腕の封印を解こうとすんな！死ぬだろうが！」

このようなやり取りが30分ほど続いて結局総理とはそのまま解散
龍王にとっては祖国に約5年ぶりの帰国、しかしその表情は晴れない

「…………絶対に毎日がトラブルでいっぱいだ…………はあっ」

一人になってようやく事の重大さに気付いたため息を一つ
どうやら彼もまた苦労人と言えば苦労人だったらしい

3月21日、静かにだが確実に物語が動こうとしていた

第1話 「プロローグ」(後書き)

感想やご意見、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9228z/>

我が道を行く者.....行くのはいいが行きすぎに注意しろ！！

2011年12月28日22時54分発行